

Economic Indicators

定例経済指標レポート

指標名: 国際収支(2013年4月)

発表日2013年6月10日(月)

～経常収支の黒字は拡大局面へ～

第一生命経済研究所 経済調査部
担当 エコノミスト 大塚 崇広
TEL : 03-5221-4525

		原数値 経常収支 (億円)	季調値 経常収支 (億円)	貿易・サービス収支			所得収支
				貿易収支	サービス収支		
					貿易収支	サービス収支	
2012	1月	▲ 4,556	3,277	▲ 6,695	▲ 5,532	▲ 1,163	11,157
	2月	12,026	8,331	▲ 2,646	▲ 865	▲ 1,781	11,548
	3月	13,074	4,746	▲ 5,278	▲ 4,295	▲ 983	10,923
	4月	3,735	3,917	▲ 7,567	▲ 5,024	▲ 2,543	12,394
	5月	3,421	4,350	▲ 6,384	▲ 4,023	▲ 2,361	11,953
	6月	4,221	7,106	▲ 4,108	▲ 1,928	▲ 2,180	12,048
	7月	6,625	3,602	▲ 7,558	▲ 4,936	▲ 2,622	12,106
	8月	4,448	6,559	▲ 4,984	▲ 2,590	▲ 2,394	12,400
	9月	5,137	▲ 402	▲ 11,951	▲ 8,980	▲ 2,971	12,368
	10月	4,208	5,010	▲ 6,403	▲ 4,498	▲ 1,905	12,144
	11月	▲ 1,796	3,633	▲ 7,179	▲ 5,092	▲ 2,087	11,744
	12月	▲ 2,307	2,152	▲ 8,537	▲ 6,331	▲ 2,206	11,983
2013	1月	▲ 3,648	4,184	▲ 7,947	▲ 6,061	▲ 1,887	11,898
	2月	6,374	▲ 281	▲ 13,162	▲ 11,522	▲ 1,640	13,563
	3月	12,512	3,424	▲ 9,195	▲ 7,676	▲ 1,519	13,392
	4月	7,500	8,527	▲ 9,387	▲ 7,635	▲ 1,752	18,910

(出所)財務省「国際収支統計」

○ 所得収支黒字の大幅増加を主因に経常収支の黒字（季調値）は前月から拡大

4月の経常収支は原数値で7,500億円の黒字と、コンセンサス(3,309億円、レンジ:▲590億円～5,063億円)を上回る結果となった。季節調整値でみると、8,527億円の黒字(3月は3,424億円の黒字)と前月から黒字幅が大幅拡大した。所得収支の黒字が直接投資収益の増加を主因に大幅拡大したことが影響している。ただし、財務省によると直接投資収益(受取)において大口のものが複数見られたことが影響したようであり、4月の伸びに関してはやや割り引いてみる必要がある。

貿易収支(季節調整値)は▲7,635億円(3月▲7,676億円)とほぼ横ばいでの推移であった。内訳を確認すると、輸出金額(前月比▲1.5%)、輸入金額(前月比▲1.4%)ともに前月から減少した。円安による貿易赤字拡大圧力(円安は短期的には貿易赤字拡大要因)は4月も続いたようだが、このところは数量面での動向が貿易赤字縮小圧力となりつつあることが注目される。価格の変動を除いた実質輸出(日本銀行公表)は①海外経済の緩やかな回復の継続や②円安の数量効果の顕在化、③日中関係悪化の影響の緩和、などを背景に持ち直しつつある。また、実質輸入も増加が一服しており、円安により輸入品が割高となったことで輸入量が抑制されている可能性がある。

○ 貿易外収支の動向: 所得収支の黒字が大幅増加

貿易外収支の内訳を季節調整値で確認すると、サービス収支は1,752億円の赤字と前月(▲1,519億円)から赤字幅が小幅拡大したものの、均してみればこのところは赤字幅が縮小する傾向にある。内訳をみると、これ

まで海外経済の減速等を背景に赤字傾向で推移していた其他サービス収支が黒字傾向に戻りつつあることや、円安等を背景とした訪日外客数の増加により旅行収支の赤字が縮小傾向にあることが目立つ。

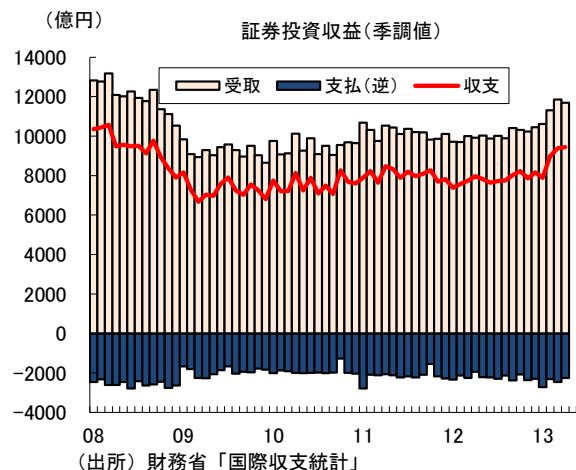
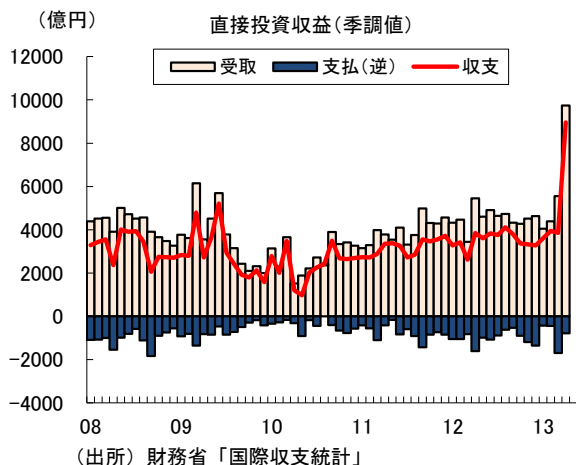
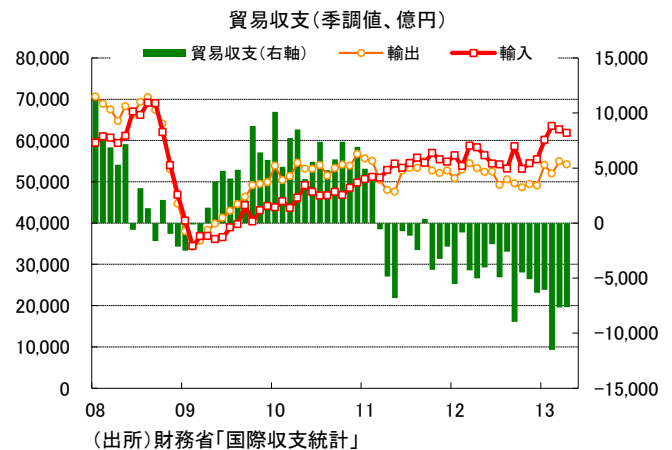
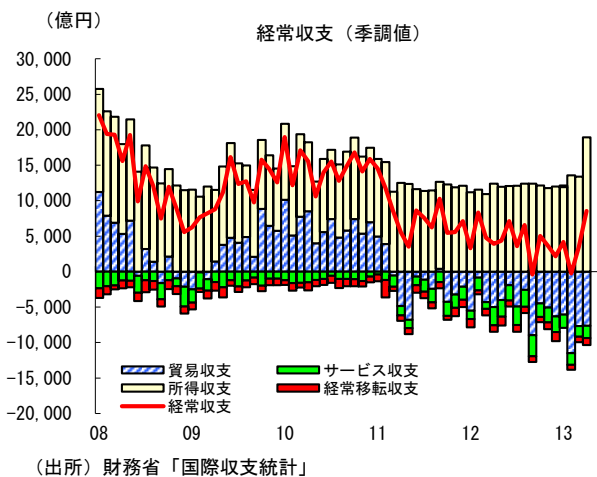
所得収支をみると、4月は18,910億円の黒字と前月(13,392億円)から黒字幅が大幅拡大した。前述の通り、直接投資収益(受取)において大口のものが複数見られたことが影響したようだ。また、比較的為替相場との連動性が高い証券投資収益も黒字幅が小幅拡大しており、円安の進展による黒字額の押し上げが続いている。

○ 経常収支の黒字は拡大局面へ

このように、所得収支の黒字の大幅増加を主因に経常収支は前月から黒字額が大幅増加した。4月の大幅増加は直接投資収益で大口のものが見られたことが主因であり、5月は反動減が予想される。ただし、これまで経常黒字縮小の主因となっていた貿易収支は数量面から赤字縮小の兆しが見られており、経常収支は黒字拡大局面に入りつつある可能性が高い。

先行きを展望すると、貿易収支は①海外経済の回復による輸出増、②円安の数量効果(輸出量の押し上げと輸入量の抑制)の浸透が見込まれ、徐々に赤字幅を縮小させよう。所得収支は、これまで急ピッチで進んできた円安には足元一服感があるものの、豊富な対外純資産を背景に高水準の黒字を維持する公算が大きい。燃料輸入の高止まりにより貿易収支の黒字復帰はしばらく見込めないが、総じて経常収支の黒字は緩やかな拡大基調となるとみている。

一方、リスク要因は海外経済の動向である。中国経済の回復が遅れていることに加え、米国経済も強制歳出削減の影響が懸念される。仮に海外経済の回復がさらに遅れるということになれば、輸出の回復が抑えられることで貿易赤字の縮小は遅れ、経常黒字の拡大も後ずれすることになる。



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。